

「タニマチ」オーナーを支える大衆心理

盛田 常夫

狂騒のサッカー欧州選手権が終わった。ビッグネーム同士の決勝を期待していた向きには、不満の残る選手権になった。どのトーナメントでも、決勝が最高の勝負を見せる舞台になるとは限らない。テニスの四大大会でも、決勝が壮絶な闘いになるのはきわめて稀で、決勝に至るまでに数々の名勝負が生まれるが、決勝そのものはかなり淡泊な試合で終わることが多い。

面白いことに、ファンの心理は大衆の心理そのものである。ギリシアのチームには欧州リーグで活躍している選手がいないから、ほとんどの観客はギリシア選手の名前を知らない。他の強豪チームには、中心になるスター選手がいるから、その選手を軸にゲームを見ることができる。ところが、無名の選手だけだと、ゲームを追いかけることができない。だから、ギリシアの試合はつまらないという反応が出てくる。強豪チームが早々と敗退し、「つまらないチーム」が優勝した今年の欧州選手権は、面白くなかったという結論になる。

これがファンの心理だが、しかしギリシアが勝つにはそれ相応の理由がある。しかし、ギリシアのプレーが玄人筋には受けても、ファンには受けない。スポーツでも政治でも、同じ現象が見られる。

一極集中は何故好まれる

政治でもスポーツでも、一極集中現象が一般的に観察される。何も北朝鮮の権力構造だけが、特殊な社会現象ではない。日本でも、野球の最大の人気チームは巨人で、政党では自民党という状況が、何十年も続いている。人々は強いものに憧れ、応援する。もちろん、反権力で貫き通す人もいるが、これは社会の少数派。とくに大きな事件でも起こらない限り、社会の多数は強者の側に付き、弱者を虐める。社会正義に反するが、これは真実だ。どうしてだろうか。

スポーツであれ政治であれ、その世界に君臨する権力に従い、時には慕い支持する大衆心理をどう説明することができるだろうか。この現象には大衆の「現状への安住心理」が働いている。強いものが世界の大勢を占める。したがって、その輪の中に居れば、仲間外れになることはない。人々は無意識の内に、社会秩序への順応反応を行っているのである。

実際、自らが応援する選手やチーム、あるいは政党が負けてばかりいたのでは、ストレスが溜まる。弱いチームを応援していると、大勢から馬鹿にされたり、仲間外れにされたりすることもある。競ってメディアが取り上げ、誰もが知っている選手やチームが常に頂点にいれば、自然とそこに目が向く。金権力を持つものが金と権力を使って他を圧倒し、常に頂点に立つことで、多くの人々は溜飲を下げる。安易な大衆心理である。

この大衆心理こそ、保守主義を支える社会的心理だ。それが時にはファシズムを生み、独裁者を支える。スポーツの世界でも政治の世界でも、一極集中現象が生じる所以である。

判官贔屓

もちろん、大衆にはこれと相反する心理も働く。権力が不合理な強制を強い、弱者が理不尽な苦しみを受けるとき、人々は弱者を応援する。判官贔屓は健全な社会的反応だと言える。しかし、革命的状況にでもならない限り、判官贔屓が社会を支配することはない。

たとえば、優勝候補に上げられないラトビアやギリシアが強豪相手に善戦するまでは良い。「なかなかやるじゃない。頑張れや」ということになる。ところが、彼らが強豪国を負かし、頂点に立つことは許されない。それは既存の勢力図を塗り替えることになる。ファンの心理として、これは困るし許せない。強豪同士が最後

の闘いを繰り広げることで、ファンは安心する。予定調和でファンは納得できる。

2002年のW杯はうまくドイツとブラジルとの決勝になったが、これが韓国とトルコでは白ける。要するに、いかに強豪と互角に闘っても、強豪を負かしてはいけない。新興勢力が伝統勢力を簡単に打ち負かすと、世界の常識が変わってしまうから困る。よほどのことがない限り、革新的な変化は許されない。政治もスポーツも同じなのだ。

スポーツ興業

こうしたファン心理を最大限に活かしたスポーツ興業がプロレスである。常に頂点にある強者、正義を代表する正統派、強い悪役・憎まれ役、道化役が、シナリオにしたがって格闘ゲームをする。人々はそれぞれの選手に、日常生活で出会う人物をだぶらせ、代理戦争による心理的葛藤の勝利を願う。さすがに最近では、このアメリカ型のショー・ビジネスに飽きたファンが「がちんこ」ゲームを好み、K1などの興隆を生み出しているが、シナリオに沿った決着という期待は、ファンの深層心理にある。

ところで、日本のプロ野球はどうか。ファンの分布が日本社会の権力分布に相似していることは確かだろう。今、そのことは措いて、スポーツ興業として見たらどうだろうか。

まず、総体としてのプロ野球機構は組織の体を成していない。コミッショナーの組織と権限はきわめて小さく、コミッショナーはオーナー会議の司会役以上の役割を果たしていない。要するに、プロ野球機構は興業経営組織として、人も組織もないに等しい。こういう組織では、組織全体をどう発展させていくのかという将来計画や見識に欠ける。ただ、日本にはこの種の団体・組織は多い。組織としてのマネージメントがなく、組織の中の強い個別メンバーが実権を握って、組織の生死を支配している。とくにスポーツ界や政治の世界では、今でも親分・子分的な関係が幅を効かせ、組織を律しているものが多い。

全体を取り仕切る組織が欠如するプロ野球興業では、人気球団のオーナーが実権を握る。他のプロスポーツの世界でも、この種の現象は観察されることだが、日本のプロ野球がとくに歪（いびつ）なのは、巨人だけが突出している現状を制御する手段をもたず、巨人の成り行きで物が決まる仕組みになっていること。他球団のオーナーは渡辺恒雄の顔色を見ているだけ。自分でプロ野球の将来を語る人がいない。日本社会の縮図を見ているようだ。金と力がある者が組織を支配し、その他大勢は発言権がなく、ただ付いていくだけ。こういうオーナーたちに、プロ野球を背負っていけるはずがない。プロ野球の将来を語るることのできない無能なオーナーたちは、次世代を担う若い人々にバトンを渡すべきではないのか。

これに比べ、Jリーグは新しくできた組織だけあって、まず組織体としての確立から始まっている。個別の人気チームのオーナーが幅を効かせるのではなく、リーグ全体としてどう発展させて行くのかという視点が明瞭である。

このJリーグと比較すると、これまでのしがらみが纏わりついて離れないプロ野球は、タニマチ的なオーナーたちの道楽事業という性格から抜け出られない。興業組織の近代的経営という視点から見ると、完全に落第である。こういうオーナーたちから実権を奪わないと、日本のプロ野球の将来はない。

もっとも、プロ野球の縮小・衰退は、日本のスポーツ界全体にとって悪いことではない。プロスポーツの中で野球ビジネスが突出しているために、優れた運動能力を持つ者が過剰なほどに野球に集中する。プロ野球のないヨーロッパでは、サッカー以外にも、バレー・ボールやアイスホッケー、あるいは卓球などがプロスポーツ・ビジネスとして成立している。日本もプロ野球が縮小すれば、もっと多様なスポーツに、運動能力のある人材が流出していくだろう。そうすれば日本のスポーツ界は変わる。何も悲観することはない。

(2004年7月)

(関連記事は<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)